

西洋ロココ時代の衣装再現

～天然染料による赤色染色の検討から～

氏名：福岡奈穂

学籍番号：0333035

指導教員：道明美保子

◆研究の目的

広くロココと呼ばれる時代(1715-1789)、その華麗なロココ・モードが花開いた地はフランスであった。

フランスでは、1715年のルイ14世の没後、その絶対王政下から解放された貴族たちの、贅沢と放逸の快楽主義がヨーロッパ・パリを風靡する。彼らは日々を享楽することのみを考え、自分達の富と栄光を、優雅で気品高い生活のためにあます所なく費やした。ロココ・モードの幕開けである。

ロココという芸術様式は、高度で巧みな技術と、のびやかで洗練された形態や装飾、柔らかく繊細な曲線が特徴であるが、ロココ様式はそもそも、18世紀の貴族社会における室内装飾の様式のことであった。しかしそれはやがてフランス男女の服飾にも浸透し、服飾においてもその特徴が見られるようになっていった。到るところに変化と工夫が求められ、視覚的表現法にたえまのない追求がなされ、服飾は芸術にまで高められた。

その巧みな技術で構成された優雅なファッションは、ヨーロッパ全土で爆発的な人気を誇り、フランス・パリはファッションの中心地となっていった。

ロココ・モードは、近世服飾の中でも最も華やかで、すぐれた技巧が成し遂げられる時期である。この時代の男女の服装センスは、やがては近代・現代の服装の要素を含むものであり、この中から現代のモード観が生まれ出ている。この意味において、ロココ・モードの果たす役割は極めて大きい。

「服飾は、人間を精巧な芸術作品に置きかえた」(文化人類学者ハンセンより)と言われるこの時代の衣装を、実際に使われた染料と素材、パターンを用いて再現することで、当時の優れた技巧や変化

への工夫が、どのように服飾に表現されていたのかを理解したい。

またロココ時代には、女性が生来の感受性を武器に政治、文学、芸術などにかかわる社会的な立場を得て時代のヒロインとなるとともに、服飾の上でも主導権を握るようになっていった。このことから、女性の権力の象徴であり、ロココ・モードの真髄とも言われる衣装「ローブ・アラ・フランセーズ」の再現を試みた。^{1),2)}

◆ロココ時代と女性の服飾¹⁾²⁾

ロココの世界は、17世紀中頃から18世紀始めにかけて君臨し、フランスを一大王国に築きあげたルイ14世の治世から、着実にその生活文化を培って来た王侯貴族たちは、もはやその退屈で、且つ窮屈な空気に飽き足らず、王の没後、次第に行動の自由を取り戻し、彼らの貴族としての名誉と富をあます所なく生活に費やした。こうした退屈で安穏な、宮廷を中心とした貴族たちの生活は、1789年のフランス大革命勃発まで、その日その日を快楽に生きるために、豪華な衣装でもって、上流階級の社交の場である舞踏会やサロン、観劇に明け暮れた。衣装の上でも男女とも、誰よりも自分をより美しく装うことに専念し、そのための服装や装飾品への膨大な浪費も、少しも惜しむことなく、むしろその財力を費やすことを至上の悦びとしたのである。ロココ様式で統一された宮廷や舞踏場、劇場やサロン、食堂や居間、寝室などの空間装飾は、まさしく彼ら王侯貴族の権威と財力を象徴するものであり、ヴェルサイユ宮殿はその代表的なものであった。

このような豪華な生活環境の中で、前世紀からの長い貴族社会において何の緊張感も持たない日常の生活に、ただ浪費することと着飾ること、社交のための貴族としての教養を身につけること、美しい貴婦人や、高貴な紳士と交際するために、人々はあらゆる高価な衣装や装飾を求め、次々に生みだされる流行をいち早く取り入れ、巧みな技術で構成された衣装に多くの費用を投じ、ただ異性を魅了することに、言い知れぬ快楽を覚えた。ロココの乱れた道徳観が、やがて貴族社会の崩壊へと迫っていくが、この過程が近世服飾の上でも、最も華やかで、優れた技巧が成し遂げられる時期であり、同時にやがて幕を閉じる近世服飾の仕上げの段階でもある。

そんなロココ・モードの真髄は何と言っても女性のパニエとローブであろう。人間の肉体を強調し、肉体の表わす曲線を楽しみ、さらに豊かなりボンやひだ飾りで、人工的な曲線とゆらめく動きを求めたものがロココ服飾であった。例えば婦人のローブに見られるごとき、膨大なパニエによって表現される膨らんだ腰と細胴との曲線的な対比、男性のアピ・ア・ラ・フランセーズの優雅な曲線が当時の衣服を特徴づけている。材質の贅沢さ、色彩の自由な取り合わせ、刺繍の華やかさ、凝った細工のボタン、豊富なりボン等がこれに色をそえる。到るところに変化と工夫が求められ、視覚的な表現方法にたえまのない追求がなされ、ロココ即ち、ルイ 15 世時代の服飾の動きを支配している。このような、変化への憧れと、新奇なものへの探求は、服飾のあらゆる現象を次第にその極限へと追いつめた。

◆素材⁴⁾

ロココ時代の衣装(ローブ・ア・ラ・フランセーズ)には、主に麻・絹の二つの素材が重宝されていた。一般市民には麻が幅広く使われていたが、上流貴族のドレスには絹が使用されていた。

貴族たちの衣装には絹が重宝されていたが、

中でも主にシルクタブタが使用された。その他には、シルクブロード、シルクサテン、シルクファインなどがあげられる。

◆染料³⁾

ロココ時代の人々は、トルコ赤に多大な憧れを抱いていた。そのため、赤色は王家の色であり気品高い色として浸透し、貴族たちにも好んで用いられた。今回調べたロココ衣装にも、赤色を使ったドレスが多数見られたことから、当時使用されていた天然染料の中から赤色染料に着目して実験・検討を試みる。

<実験方法>

①精練：精練には非イオン性界面活性剤ノイゲンHC (3g/l) を用い、90℃で 30 分間処理した後、イオン交換後蒸留した水で洗浄、風乾した。

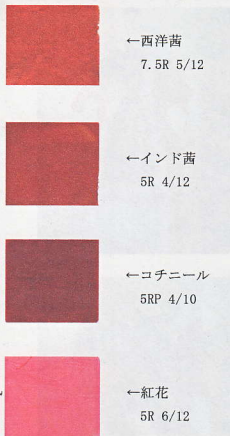
②抽出：染料は、西洋茜、インド茜、コチニールおよび紅花を用いた。すべて田中直染料店より購入した。各々染液濃度が 1% 水溶液になるよう抽出した。

各々染料 2g を、イオン交換後蒸留した水を用いて 90℃で、30 分間抽出した。この作業を 2 回繰り返し、合計 200ml の染液とした。コチニールにおいては、弱酸性にするため 0.5cc/l の酢酸を加えた。紅花は事前に黄水抜きを行い、炭酸ナトリウム 1% 水溶液を加え 0℃で 30 分間抽出した。抽出後、クエン酸 20% 水溶液を加え pH5 の酸性に近づけ、合計 200ml の染液とした。

③染色：浴比 1:50、1:100、1:300 を用い、各々液温 90℃で 30 分間染色した。紅花のみ液温 0 度で 30 分間染色した。

<実験結果>

浴比 1:50、1:100 および 1:300 で各々染色した結果、浴比による染まり具合の差はあまり見られなかった。よって浴比 1:50 を衣装再現の染色に用いることとする。



染色布と表1および図1より、コチニールが最も濃く染まっていることが分かるが、その色相は5RPと紫がかった赤色である。紅花はコチニールに比べ赤色に近いが、染まりが薄く染色にさらに大量の紅花が必要になるという難点がある。西洋茜とインド茜とを比べても、色相は少し異なる。

<染料検討>

実験より染色した布の色相と、文献にあるロココ衣装の色相とを比較検討した。ロココ時代は、トルコ赤に憧れを抱いていたものの、その真紅の赤は表現できずにいた。そのことから、文献に残っているロココ衣装には、少しオレンジがかった赤色が多く見られる。そこで、ロココ衣装の色相をCOLOR READERで測定した結果、西洋茜の色相が最も近いことがわかった。



←7.5R 5/10



←7.5R 5/8

色素材料	λ max	染液 pH	色相
西洋茜	410nm	6.54	7.5R 5/12
インド茜	425nm	6.09	5R 4/12
コチニール	495nm	3.83	5RP 4/10
紅花	400nm	4.49	5R 6/12

表1 染色布の λ max、pHおよび色相

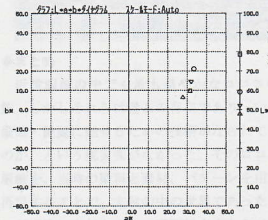


図1 染色布のL*a*b*

(○: 西洋茜 △: インド茜 △: コチニール □: 紅花)

◆衣装再現

<素材>……絹タフタ(装飾にレース、サテン等使用)

レース:糸を編み、組み合わせ、種々の透かし模様を作った生地や編地。袖部分、ローブの前部分、ペティコートの裾部分に使用。

サテン:綿子織の織物。布面は滑らかで光沢がある。ストール部分に使用。

<染料>……西洋茜(1%水溶液を用い染色)

<パターン>……京都服飾文化財団紹介 Patterns of Fashion 1

<ロブ・ア・ラ・フランセーズ>



<パターン>



◆まとめ

近世服飾の中でも最も華やかなロココの服飾。しかしそれらは過去の存在であり、いかに豪華・艶麗に魅せるための技術がなされていたのか、という現実味がなかった。そのロココの服飾を、当時の染料と素材、パターンを用いて再現することで、文献の中の世界であったロココが現実のものとなり、同時に文字からは分からない様々なことが理解できた。

まず染料において、赤色天然染料の中でなぜ

西洋茜が普及したのか。この理由には、まずコチニールに比べ西洋茜や紅花は大量生産が容易であるということがあげられる。またインド茜はまだ輸入され始めた頃で高価であった。さらに実験から、紅花は染色自体に大変手間がかかるということが分かった。

次に素材において、なぜシルクタフタがドレスに適していたのか。これは、実際に衣装を製作していく過程で知ることができた。シーチングの段階では、素材に力がなく少しだらしないドレスになってしまったのだが、実際使ったシルクタフタには光沢と張りがあり、10mもの布に多数のギャザーをよせた、広がりのあるドレスをより良く魅せるために効果的だということが分かった。

最後に、ロココ時代の女性の身体において。パターン通りに衣装を製作した結果、現在の西洋女性からは想像もできない程小柄なドレスができあがり、当時の女性は本当に小柄であったということが理解できた。また、袖つけが現代に比べかなり後ろ側につけられており、常に胸を張った状態で生活していたということも知ることができた。その他にも、例えば見えない部分にはシルクタフタではなく麻を使用したり、見える部分にだけ装飾を施していたりと、ロココの豪華さの中に節約という似合わない部分も感じることができた。

以上、染料・素材・パターンという三つの観点から衣装を再現することで、ロココの服飾芸術を実感することができ、私にとって非常に有意義な卒業研究であった。

◆主要文献

- 1) 蔵重和子:近世服飾の技巧性—ロココ時代—,帝塚山短期大学紀要 自然科学編, 13, 37-47, (1976)
- 2) 菅原珠子:十八世紀フランスの服飾について—舞台衣装との関連—,家政学雑誌, 19(6), 43-47, (1968)
- 3) 吉岡幸雄・福田伝士:「自然の色を染める—一家庭のできる植物染め—」,紫紅社,東京, 86-139, (1996)
- 4) <http://www.biwa.ne.jp/~kotosen/ramie/world.html>